

## 「古典籍の取り扱いと実際」〈実習〉

大谷大学図書館 尾崎 正 治(司書)

図書館の尾崎と申します。事前にお聞きしていただきましたよりも、ご出席の皆さんが経験豊かな方々ばかりですので、これから口頭試問を受けるように緊張しています。普段、私はほぼ毎日、古代から近世までのいわゆる古典籍を手にとりながら仕事をしています。例えば、今日中に、大蔵会の展覧目録の校正をしなければならぬので、一度も触らなかつた、という日も偶にはありますが、基本的には、毎日、古典籍を手にとることができます。そういう意味では、一番、大谷大学の古典籍を傷めているのは私かもしれません。かつて、図書館の先輩をはじめ、多くの方々から教えられたことをできるだけ守りながら、傷つけないように気を付けている積もりです。今日は、私が注意していることをお話させていただきたく思いますので、よろしく願いいたします。

皆さんのお手許にコピーを一枚お配りしていると思います。これは『日本の美術』第436号の「古写本の姿」の中の一部で、文化庁の主任文化財調査官の藤本孝一先生が執筆されたものです。取扱い上の注意点が簡潔にまとめられています。資料を触る時に手袋をするか、直に手で触るかというのは、多少、議論のあるところだろうと思います。私の場合は、基本的には石鹸で手の油を洗いとって触る、指の感覚を活かして掴むということに

しています。どういう場合に手袋をするかといえますと、大谷大学には中国の秦漢時代を中心にした古印が八百点余り、封泥も二百数十点あります。これを手にとる場合は、ここにありますが手袋を使います。また硯の場合は、どうするか悩むところですけれども、直に触る時は手袋をします。箱に入れて運ぶ時、手袋をしていますと滑らせて落としてしまう可能性がありますので、その時は手袋をはなします。そのような使い分けをしています。また、資料を見ていて汗を落としたと聞かれます。資料を見ますとそれらしい染みに出くわすことがありますので、私自身はこういうタオルを巻きます。何人かで資料を見る時には、マスクをするようにしています。本学にはよく貴重書庫の見学に来られたり、貴重資料の調査閲覧に来られます。特に古代・中世の資料の場合に立ち会うことがありまして、お話をすることもあります。その際、マスクをできるだけするようにしています。中には大きな声を出して資料の前で喋り、時々唾が飛んでいたりします。ちょっと気の利く人でしたら、話をする時によくハンカチを口元にあてられるのを見ます。こちらから言わなくても最初に、石鹸で手を洗ってください、マスク、或いは、ハンカチをあてて話をしていただくと安心します。今年の一月から角筆の専門家が重要文化財に指定されていま

す『判比量論』の調査をされています。いつも私が立ち会っているわけですが、その先生は先ず手の洗淨をしてマスクをかけてくださいますので、これだけで信頼することができます。

普段は石鹼で手を洗って触りますが、それと共に、こういう経轆(きょうりょう)を使うこともあります。このコピーの中には左の下のところに竹べらの写真が載っています。藤本先生の竹べらを見せていただいたことがありますけれども、私も経轆をよく使います。長いものも使いますが、一番よく使いますのは、一方が鋭角になっており、もう一方が鈍角になっている短いものを使っています。折本の場合、長い経轆を紙背にあててめくってゆくようにしています。虫損のある卷子本を扱う時も、経轆を用いて虫損箇所が折れないようにします。袋綴じの場合でも帙に収める際、基本的には第一冊目を裏返しにしますが、題簽にあてて皺がよらないようにしたり、開いて角折れをなおしたりと、色々なところで重宝しています。藤本先生は利用者が資料を直接手にとらず、三角形、或いは、扇形に裁断した和紙を用いて開くように求められています。見本を作ってみましたので、各館で使い易いように改良されては如何でしょうか。

先ほどの講演は石経と拓本という内容でした。参考資料として、拓本を軸装したものが掛かっています。装訂の上では、その他に折本系、卷子などがあります。一般的に、掛軸の表装の種類には、本尊表具・大和表具・袋表具があります。主要な各部の名称は、本紙の上下にあるのが一文字、その上に垂れるようになってるのが風帯、掛けてところが掛緒、掛緒に付いている紐が巻緒、掛緒の付いているところを発装(八双)と呼んでいます。資料を掛ける時、掛緒を引っかけて軸身

の端の軸首を持ちながら回転させて下ろします。巻き戻す時には、軸首を持ちながら回転させて巻き上げますが、脇をしめて軸首を親指・人差し指・中指で持ち、手の平を天井に向け、薬指を裏の端に立てて巻き上げる方法もあります。巻き上げてゆき風帯をたたみませんが、その時、発装(八双)のところを中心に和紙を入れておきますと、巻緒を巻く時に裏が痛みにくくなりますし、巻緒の跡もつきにくくなります。少し戻りますが、掛軸はどうしても一文字が傷みます。この傷みを進行させないように巻き上げるには、傷んで剥がれかけている一文字の下、数センチか十センチのところで一旦、巻き上げるのを止めて、直接、傷んでいる一文字にあて、そのまま軸首を回転させて巻きますと、一文字の傷みが進みません。そして、巻き上げて巻緒を巻きますが、最後に、巻緒を重ねて掛緒の右の外から内側に通し、掛緒の左の下に入れます。その後、桐箱に収めますが、発装(八双)を上に向け巻緒をだらりの帯のようにしておくのが優雅であると、言う人もいます。たまにブカブカ巻きをして軸首を強く回転させたり、竹の子巻きになったのを軸首を逆回転させて指で端を揃え軸首を強く回転させる人がいます。こういうことをすると資料が傷みます。藤本先生も「締め上げないようにする」と書いておられます。

拓本の場合、掛軸以外に、鑑賞とか手本にする法帖があります。その装訂には折本と折帖仕立てとがあります。紙を貼り合せた厚い料紙の表を内側に二つ折りにして継いでゆきますが、その方法によって片面のものと、両面のものがあります。片面折帖仕立ては「突合せ折帖仕立て」「糊入れ」とも言います。裏面の小口側の端五ミリから一センチ程度に上から下まで糊を付け、各料紙の小口と小口を突合せて次々に重ねてゆくものであり

---

ます。折本と同じ体裁に見えて、帖の表側は各見開きが完全に開きますが、裏面は途中までしか開きません。開かないからといって力を入れすぎないように注意することが必要です。また、開いてみる時段差が生じますので、資料が無理しないように台を置くことも一つの方法だと思います。

あと卷子本、巻き物もあります。現在、一般的に卷子本と呼んでいますのは、料紙を何枚も横に継いで、継ぎ紙の末端に軸棒を付け、これを芯にして料紙を巻き込むものであります。巻頭に付いている表紙は裱紙・標紙、或いは、標と表記され、資料を保護しています。表紙の端に竹ひご・薄板を折り込んで付けたところが発装(八双)で、発装(八双)の中央に紐が付けられています。これを標帯と呼んでいます。紐の先に象牙製の爪が付いているものもありますが、紐だけのものが一般的です。開く時、かつては標帯を標の天地に巻くようにしてから少しずつ見てゆくように教えられましたが、標にも多くの情報があるので傷めないようにしなければならないとされ、現在では標帯を小さく纏めて標裏(見返し)に入れるようにして見るようになってきました。できれば太巻き状の筒に上から下まで五ミリ程度の切り込み(溝)を作り、その中に標帯をいれ発装(八双)をあてるか、絹布を巻いて芯にすると傷みが進みません。暫く開いておく時には、少なくとも発装(八双)を下に向けた状態にしておかなければならないと思います。奥まで開いた状態から巻き戻す時、紙背に文書があったり、表の行間や余白に書ききれないために裏に書いた裏書や印記が擦られている場合もありますので、資料を机の面に擦らさないようにしなければなりません。薄様の上で行うと、万が一、紙片がとれた時にも気付くことができます。そして、巻き上げたら標帯を資料に巻きますが、藤本先生も、「軸を

持って巻を締め上げない、紐をきつく絞めないようにするなど、必ず心にとめておかねばならない」と書かれていますように、注意する必要があります。標帯のかけ方は他館の資料を拝見した時は仮どめをし、自館の資料の場合はしっかりと×に巻き、最後にその下に潜らすように通しておくことと緩まないと教えられてきましたが、締め上げないことや、弱くなっている標帯を切らないように注意しなければなりません。

以上、講演にあわせる形で掛軸、折本、卷子本の取扱いについてお話させていただきましたが、資料を手にとる前に、手の洗浄以外に、腕時計・ネクタイピンなど、資料を見る時に障害となるものを取り外すことや、保存上における太巻き、ラベル、保存箱の存在に言及できませんでした。また袋綴じも扱いによっては直に皺がよります。これらの点については、今後の課題として、各館でもう一度、確認していただければ幸いです。